

300人しか住めない、東京です。

みくら島村役場ではたらく本



モノはないけど、  
意味がある。

人口300人。みくら島。

コンビニもない。スーパーマーケットもない。  
病院はなく、あるのは診療所だけ。  
金融機関は、たったひとつの郵便局。

でも、一人ひとりが  
この島で暮らす意味を持っています。  
顔が見える島民のため、  
一つひとつの仕事に意味があります。  
一人ひとりの職員が、  
はたらく意味を持っています。

そう、この島には「意味」がある。  
何より、あなたがこの島に来て  
島民300人のためにはたらくられることは、  
この島にとって大きな意味があります。  
あなたが求めている仕事や生きかたは、  
今いる場所にありますか？  
それとも、このみくら島にありますか？



## みくら島のひとのこと

村役場職員がみくら島ではたらく意味 —— P6～13

島民がみくら島で暮らす意味 —— P14～17

## みくら島のモノのこと

みくら島にあるモノの意味 —— P18～19

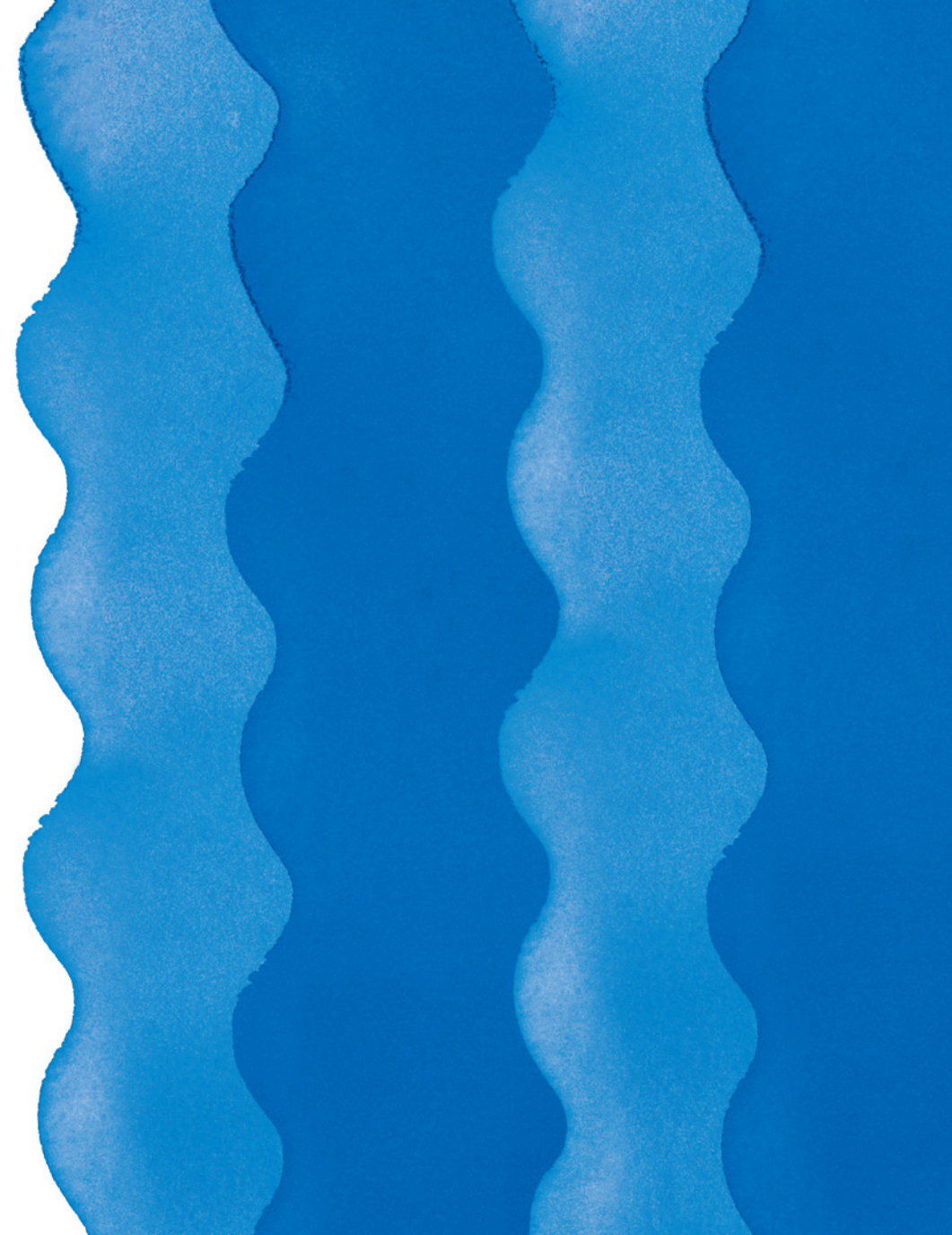
## みくら島のコトのこと

みくら島にあるコトの意味 —— P20～21

## みくら島のfeelなこと

みくら島で感じられること —— P22～23

あとがき —— P24～25





御蔵島村長

## 徳山 正彦

御蔵島村出身。後継ぎとして島に戻り、村役場職員として従事。  
2023年からは村長として、島民の生活を支える。お互いを気  
かけ、みんなで生きる島の文化を守り続けたい。



廃車が放置された島。  
それでいいはずがない。

以前の話ですが、全国の離島地域で使用済み車両の放置が社会問題となっていた頃、御蔵島においても、使い終えた車がそのまま山に放置されていました。処理の仕組みがなかったことで、当たり前のように積み上がっていく廃車の山。今ほど環境問題の話題があがる時代ではありませんでしたが、このままではいいはずはない。当時、私は村役場職員として島の将来を考え、島外搬出による処理の仕組みづくりに取り組みました。島外搬出となると海上輸送にお金がかかり、当然、島民への負担は重くなります。当初は、「今まではタダで放置できました」という言葉も聞かれました。でも、いつか誰かがやらないといけないこと。だから私が今やろうと、意志を貫き行動しました。今では放置された車もありません。キレイになった山を見ると、行動を起こして良かったなと思います。

私自身、御蔵島の出身だからわかるのですが、島の暮らしにとって役場の存在は非常に大きいです。イルカを中心とした観光事業こそ大きくなっているものの、300人が暮らし続けているために、もっと他の産業も育っていかないとけない。幸い島の外から移住してきてくださった方の新しい視点も加わり、島の特産品である黄楊（ツゲ）や桑を使った商品の開発など、民間主導で新しいことをやろうという声は大きくなっている。行政も全力で応援したい。そのためにも、まず私たち役場が取り組まなければいけないのは、家の問題です。平地の少ない御蔵島にとって永遠の課題ではありますが、2年後には5戸、10年後には30戸という高い整備目標を掲げています。家が増え、人が増え、御蔵島が活気づく。そんな島の未来を作るために、新しい仲間を増やし、役場としても果敢にチャレンジを続けていきます。





御蔵島村役場職員

## 泉 文靖

東京都小平市出身。心理学を専攻する傍ら生物学を学び、選挙関連のアルバイトを経て環境衛生に興味を持ち清掃業界へ。人とのつながりを持てる暮らしを得るため御蔵島へ移住した。



血のつながりを超えた、家族がいる。

過去に一度、私は村役場職員を辞めたことがあります。そのタイミングで、島を去るという選択肢もありましたが、妻と息子以外に家族と呼べる存在が島中にいたため、悩むことなく島に残りました。血縁はありますが、心を許せる家族のような存在がたくさんいる。そこが御蔵島で暮らす一番の理由です。息子が小さかった頃は、近所のおばちゃんに面倒を見てもらったり、妻の体調が悪い日はご飯までつくってもらった。息子も高校3年と大きくなつたし、「これからはもつと」「島の家族」に恩返ししたい。自分が島に貢献するにはどうすればいいかと考え、改めて村役場職員になりました。

島の環境は都会と比べて特殊です。私にとって心から大切な「島の家族」がいて、好きな格好で気楽に働ける場ではありますが、人によっては違うかもしれません。だから私は、島暮らしを人にすすめることも、止めることもしません。興味を持ったら島に来てもらい、辛くなったら離れればいい。私が御蔵島に来たのは30代の頃。隣近所との人間関係が希薄な都会の暮らしに違和感を覚え、人とのつながりを求めて来ました。正直な話、都会で嫌なことは御蔵島にもあります。初めのうちは、外から来た人という目線は少なからずある。私のときもそうでしたから。ただこの島には、自分を隠さずに向き合えば、人を選ばず受け入れてくれる温かさがある。ぜひ自分の目で見て判断してください。





御蔵島村役場職員

## 黒田 正太郎

15歳で御蔵島を離れ、38歳でUターン。御蔵島に戻る前は、都心で営業職をしていた。自分の子どもが1学年10クラスのマンモス校に入学することに疑問を感じ、家族で御蔵島へ。

御蔵島には高校がありません。だから、ほぼすべての子どもが、中学を卒業するタイミングで島外に出てしまいます。島の大人たちは、「子どもが生まれるたびに、「この子が15歳になるまでに、どんな経験をさせてあげられるだろう。どんな記憶を残してあげられるだろう」、そんな思いで一生懸命です。私も23年前に15歳で御蔵島を離れた二人です。林間学校や花火大会、島外から交響楽団を呼んでくれるなど、大人たちがいろいろなことをしてくれました。当時は気づかなかったけれど、それらがよい記憶として残っており、子どもが小学生になるタイミングで御蔵島に戻ることになりました。島民みんな子どもを見守る、育てる。都会では常に親の目が届く場所では遊ばせないといけません、ここ御蔵島ではそんなことはありません。

私は今、村役場で教育行政に携わっています。子どものために企画を考え、汗をかいたときに「当時の大人たちは、こんな風になっていたんだな」と思います。現在は教員の働き方改革等により、林間学校はなくなっていました。でも、林間学校は私にとって御蔵島での最高の記憶。代わりに何か別の形でできないかと検討しています。ただ、大人たちがどれだけ頑張っても、御蔵島は御蔵島。小中学生合わせてたったの38人。だから、何かイベントをするときには、一人ひとりの子どもに必ず役割がある。文字どおり「全員主役」というやつです。都会では自分がやらなくても、クラスの誰かがやってくれたら完成してしまいますが、ここ御蔵島では、全員が自ら動かないと完成しません。そういった意味では、御蔵島で育った子どもは自ら動ける人になれると思うし、「何かやれることはないですか？」と自ら聞ける人にもなれる。私の子どもも15歳になるまでにそんな人に育ってくれたらいいな。

15歳になるまでに、  
何をしてあげられるだろう。





御蔵島村役場職員

## 磯山 巧

兵庫県出身。前職は菓子の販売職。志望動機は特にないまま、御蔵島村役場に転職。村役場職員として働くうちに、「自分が働く意味」をこの島で見つけ、現在10年目。



国の顔でも東京都の顔でもなく、  
私は島民の顔を見ている。

この島の人たちは、自分のことだけじゃなく、お互いに周りの人のことも考えて生きている人が多いと思います。都会と比べて確かに不便ではあるけれど、人が生きていく上で大切なものが、この御蔵島にはある。村役場の仕事は華やかな事ばかりではありません。その中の一つが、島唯一の医療機関である村営診療所の管理運営。光熱水費の支払いや医療消耗品の購入、東京都から派遣される医師の住宅の手配など、すべて私の仕事です。この診療所がきちんと管理運営されていなければ、体調を崩しがちな、あのおばあちゃんが困る。熱を出しやすい子どもを育てている、あのお母さんが困る。いつも仕事をしながら、島民の顔が思い浮かぶんです。私は病気を診ることはできないけれど、島民の顔を見て仕事をしています。

島であろうが、都会であろうが、結局のところ、どこに行っても誰かのために働かなければなりません。だとしたら、顔が見える誰かのために働くほうが幸せだと思えます。この前、一緒にBBQをしたあの人。この島ですつと暮らしているあの人。移住してきたばかりで不安そうなおの人。私がかっこいい理由は、間違いなく島民のみなさんです。移住して間もない頃は、本土に戻りたいと思っただこともありますが、やっぱりこの人たちと離れたくない。仕事のミスで島民の方にもありました。私の力の源は、島民のみなさんです。相手を大切にできる気持ち。安心・安全な暮らし。働きがいのある仕事。都会で失われつつあるものが、この島にはたくさんあると思います。





ウェストブルックス(宿にしかわ)

## 西川 理恵 (家族写真一番左)

出身は岩手県。御蔵島小中学校の英語教員として勤務した後、御蔵島出身のご主人と結婚。現在は、「宿にしかわ」の運営を担当。子ども・子育て支援の充実を目指し、現役ママ代表として御蔵島村議員を務める。



誕生日ケーキは買うんじゃなくて、作るものよ。

「物がなければ自分たちで作る」という文化は衝撃的でした。ケーキ屋さんがないので誕生日ケーキは家で作る、花屋さんがないので卒業式で飾る花は山に行つて摘む。なければ作るという考えが、御蔵島では当たり前の前です。英語教師として島に来てすぐの頃は、こんなことも自分たちでやるんだと驚くことばかりでしたが、気がついたら普通になっていました。イベントも、なければ作るのが当たり前。最近もフラダンス仲間とハワイアンナイトのイベントを企画しました。自分たちで内容を決めて、ふれあい広場に島民のみなさんに集まってもらい、食べ物や飲み物を振る舞い、自分たちは踊る。フラダンスのほかにも、島にはいろいろな社会体験の集まりがあって、お互いのイベントに参加したりしています。

暮らして感じる御蔵島の良さは、生活エリアが小さくまとまっていて、人との距離が近いところ。まず物理的な距離でいうと、家も職場も学校も商店も、歩いて5分くらいのところにあるので、移動距離も短くて楽。選択肢が少ないのも逆にいいところ。都会だと食事をするにしても、どこの店かを選ぶのに疲れますが、御蔵島だとお店も限られるため、選択肢が少なく余計なことを考える労力もありません。人との距離でいうと、島民が村長や議員とも普通に世間話できる近さにいるのがいいなと思います。都会であれば多分関わらないような人とも関わり、お互いの状況を理解しながら行動できるため、助け合いも自然に生まれる。島民が少ない分、一人ひとりの意見が反映されやすいという感覚もあります。こんな環境でありながら、実は東京っていうのもね。必要があれば都会に出て行き、選択肢を持つのも御蔵島ならではの。





村営「御蔵荘」支配人

## 川崎 真美

埼玉県出身。21年間、都内のケーブルテレビ局で営業職として従事。同じ会社で働く奥さまと脱サラを決意し、島唯一のホテルタイプの宿、村営「御蔵荘」のスタッフ（現在は支配人）として移住。島民の会員投票で選ばれ、観光協会理事を務める。



「おいしい、キュウリ足りてるか？」

海が荒れて船が着かない時期は、どうしても食材の調達に困ってしまうんですが、私が御蔵荘（宿）の人間であることを島のみなさんが知ってくれて、道端で会うと声をかけてくれるんです。「キュウリ足りてるか？なかつたらやるぞ」と宿まで持ってきてくれたり、「今朝カツオが釣れたから後で持っていくわ！」とお電話をもらったり。元は島の人間じゃない私にも、温かく接していただいで、助けられながら暮らしています。御蔵島に来る前は、都内のケーブルテレビ局の営業職として働いていました。新婚旅行で行った小笠原の父島でイルカにマリ、もつとイルカと遊びたいと探して知ったのが御蔵島。年5〜6回は遊びに来ていたかな。5年くらいイルカに貢いで、もういつそ住んじゃえということで前任の御蔵荘支配人のご好意もあり、住み込みで働くようになりました。

島の方とは、今は顔を見れば声をかけてもらえる関係ですが、島に来た当初は全然話してくれなかつたんです。声をかけてもリアクションが薄いので、「避けられてる？」と思ったことも。ただ、待っていても仕方ないですし、まずは顔を覚えてもらおうと島の社交場でもある丸一商店さんに毎日通いました。店主の弘子さん（通称みっちゃん）とも仲良くなり、あとは紹介、紹介で。営業時代の経験が生きましたね（笑）。1カ月もたてば話しかけてもらえることも増え、「体が痛いんです」とボヤいたら、柔道整復師の資格を持った島民の方を連れてきてくれて、マッサージをしてくれたこともありました。最近では、島外での経験を観光協会の理事に選んでいただきました。まだまだ島のことには勉強中ですが、お世話になっている島の方、大好きなイルカのためにも、恩返ししたいです。

バイキング号 記念碑



幕末の動乱期である1863年、遭難したアメリカの商船バイキング号がみくら島に漂着。その時、島の人たちは国内の混乱をよそに、海に生きる者として、乗組員約500人を救助することに全力を尽くしました。約100年後の1967年、船籍港のニューベッドフォード市から感謝の意を込めて稲根神社の参道入口に記念碑が建立されました。

信号機、なし



みくら島には交差点がひとつだけありますが、信号機はひとつもありません!

ATMは、1台



ATMは、島唯一の金融機関である郵便局に1台だけ。でも、集落のどこからでも5分以内で郵便局に行けるので、特に不便はありません。

100年かけて育つ宝樹  
「黄楊(ツゲ)」



1世紀の時をかけ、厳しい自然環境が創る歪みの芸術。江戸の昔から将棋の駒などの最高級素材として知られるみくら島の黄楊。将棋への普及発展への貢献が評価され、2023年度には日本将棋連盟から「大山康晴賞」を受賞しました。

みくら島のソウルフード  
その2「かぶつ」



冬にみくら島の山の畑で育つ柑橘「かぶつ」。苦味があるのでそのまま食す人はほとんどいませんが、「かぶつしょうゆ」「かぶつボンズ」「かぶつ胡椒」「かぶつシャーベット」など、さまざまなものと組み合わせることで絶品に。

みくら島のソウルフード  
その1「明日葉(アシタバ)」



みくら島の代表的な食べ物といえば明日葉。豊かな森が育むみくら島の明日葉は、クセが少なく、みずみずしくやわらかいのが特徴。島民はみんな自分で摘んで料理し、食卓に並びます。抗菌作用があり、ビタミンやミネラルも豊富な明日葉があるので、比較的農作物が採れにくい冬場でも安心です。





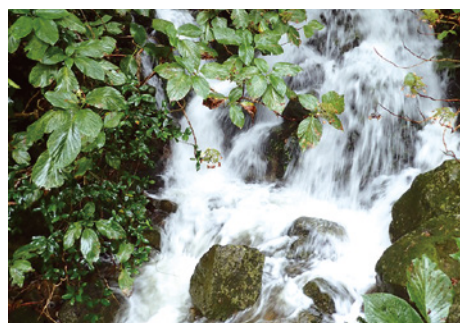
通信環境は問題ナシ  
amazonも2〜3日で届きます

「Wi-Fiは届くんですか?」とよく聞かれますが、集落の通信環境は快適。4大キャリアすべてが通じますのでご安心を。都心部から200キロ離れているとはいえ東京都内。amazonは注文してから2〜3日できちんと届きます。「思っていたより困らない」というのが、移住者の率直な感想。



よその子にも、ちゃんと叱る大人

たとえば、中学生が原付きバイクに乗っているのを見かけたら、親じゃなくても「コラ!」と地域の大人が叱ってくれる。地域みんなで子育てするのがみくら島。親の目が離せない都会とは違い、自由に遊びまわる子どもを島民みんなで見守っています。



水道代は、なんと月500円くらい

標高851mの御山を頂くみくら島は、全島原生林におおわれ、多量の水を地下にとどめます。湧き出す水は枯れることなく流れ、豊かな溪流をつくっています。水不足と言われるほかの離島とは対照的に、圧倒的に水が豊富で美味しい島です。「移住して水道代が安いことに驚いた」という移住者がたくさんいます。



1年でもっとも意味のある日  
稲根神社例大祭

島唯一の神社である稲根神社の例大祭は、島最大のイベントです。朝から夕方まで神輿(みこし)が島中を練り歩き、活気にあふれます。島外で暮らす高校生や大学生も、この例大祭で神輿をかつぐために戻ってきます。この例大祭が、島内に住む人と島外に出た人をいつまでもつなげている。みくら島の「いのち」そのものです。



15の旅立ち

島には高校がないため、中学校を卒業すると一度は島を離れることがほとんどです。親たちは、「島にいる間にどんなことをしてあげられるのかな?」と手作りでいろいろな企画をしています。村としても、高校や大学に進学する家庭向けの支援制度を用意しています。



海チームと山チームに分かれて戦う  
「村民大運動会」

年1回、村民全員参加の大運動会が開催されます。海側の島民で結成された「海チーム」と山側の島民で結成された「山チーム」に分かれての対抗戦。実は終わったあとのくじ引き大会が目当てで参加している島民が多数。

朝7時の  
「ゴミニケーション」



月水金の朝7時。ゴミ出し場にぞろぞろと人が集まり、ゴミを置いて家に戻るのかと思いきや、ゴミ収集車が来るのを待って自分で放り込む。ゴミ収集車が到着するまでの井戸端会議もみくら島ならではの光景です。

LINEで魚を調達



「魚が仕入れられなかった」と嘆く宿の主人が、島民LINEに「今日、釣れた人いませんか?」とメッセージを送ると、数分後に「これ使いな」と魚を届けてくれる仲間が現れます。

ツケ払い、という  
キャッシュレス決済



島民みんな顔見知り。「あ、財布を忘れちゃった!」となっても「ツケとくね~」というのが、みくら島の商習慣。これがホントの「顔認証」とも。

自分の子どもがいないのに、  
授業参観にくる島民



「地域みんなで子育て」が過ぎて、自分の子どもがいないのに授業参観にくる島民が多数(笑)。

カーナビは、  
外してきてください



集落は端から端まで車で2分くらい。住んで3日で道を覚えられるので、カーナビは不要です。

ご馳走は、  
チンして食べるハンバーガー



みくら島にはファストフード店がありません。都心部に行った人が、ハンバーガーを大量に買って帰り、翌日に電子レンジでチン。みんなで「うまい!!!」と言い合うのが至福の瞬間。





「観光客を増やさない」

「移住者をとにかく連れてきない」

日本全国の地域で人口減少、少子高齢化が叫ばれるいま、  
地方自治体の職員は、いつしか数字だけを  
追いかけるようになってしまいました。

地域を担う私たちが向き合うべきは数字でしょうか。  
いや、ちがうはずですよ。

私たちが向き合うべきは、

その地域に住まう人、顔が見える人たちです。

いま、私たち御蔵島村役場がいちばん欲しいのは、

「村民に100%向き合える環境」です。

「誰のためにやっているのか」「何のためにやっているのか」。

仕事をする中で、そんな疑問を

抱いたことがある人がいたとしたら、

この島に存在するたくさんさんの「意味」に触れてみてほしい。

そんな想いを込めて、このBOOKを作りました。

単に、経済合理性や同調圧力にしたがった生きかたではなく、  
自分の価値観にしたがって生きること。

そんなみくら島の人たちの生きかたこそ、

これからの日本にとって大切な生きかたではないでしょうか。

みくら島のひと・モノ・コトや

みくら島でしか感じられない「feel」を大切に守ること。

そして未来のみくら島のために、チャレンジすること。

いまの御蔵島村役場には、その両方が必要です。

10年後、20年後のみくら島をつくるのは

「いま」しかありません。

みくら島の「いま」をともに担い、

未来をつくる仲間を探しています。

みくら島で一緒にはたらこう





